

私はホテルの最上階から、東京の夜景を見ていた。あまりに高い所にいるので、ネオンも街頭も車も、全て、細かい虫のかたまりのように見えた。もし、この窓ガラスがなかったら、このまま、私は下に落ちていくのだろうか。

「もう行くよ」

彼が私の背後に立って、私の胸を掴んだ。

そして、首筋に唇をは寄せた。

私は振り返った。彼はイタリア製の背広に、色鮮やかな絹のネクタイをしていた。

「もう行くの？」

「ああ、明日は早朝会議があるから。そう言ったら」

「そう」

「部屋はとってあるから、君は朝までゆっくりしていてもいいんだよ」

「うん。私も帰るわ」

「そう、じゃあ、服を着るのを忘れないように」

「わかっているわよ」

私は椅子に掛けてあったバスローブをとって手早く身につけた。

「ドアまで送るわ」

「うん」

彼は分厚いアタッシュケースを手を取った。

そして、部屋の入り口まで大またで歩いていった。

「それじゃあ」

「さよなら」

軽い接吻をすると、彼は部屋から出ていった。一瞬、誰かに見られていないか警戒しているようだった。

私はもう一度窓まで行って、ホテルの真下を見た。彼のスポーツカーがここから見えないかと思いい目を凝らしたが、何も見えなかった。

自分の部屋のマンションの鍵を回した。

扉を開けると、中は真っ暗だった。

「まだ帰っていないのか」

喜んでいいのか、悲しんでいいのかわからない。

商社マンの主人の帰宅はいつも遅い。一度位は帰宅の遅い私を、見咎めたり、叱ったりする事があっても良さそうな物なのに、まだ、主人の方が早く帰ってきていた事はなかった。私は部屋の電気をつけると、風呂の湯の蛇口をひねった。ホテルでも軽くシャワーは入ったのだが、さらに身を清めたい。服を脱いで、ソファアの上に掛けた。そして下着姿になると、洗面の大きな鏡の前に立った。

そこには、年齢の割りにはひきしまった体が映っていた。子供を産んだ事はない。

「部長、お早うございます」

朝早くに出勤したつもりだったが、自分よりもさらに早く来ている人があった。

「お早う」

背広姿の似合わない、新入社員だった。

立ちあがって私にお辞儀をした。私は軽く頭を下げると、自分のパーティションに入っていった。

自分のデスクにつくと、まずコンピューターを立ち上げた。仕事のメールのチェックをしなくてはいけない。

いよいよ立ち上がって、キーボードに向かおうとした時に携帯がなった。

「もしもし」

「もしもし、僕だけど」

それは彼の声だった。

「あ、会議は終わったんですか？」

少し口元を隠すようにして話した。他の人に聞かれないように。

「ああ、たった今ね。今、オフィス？」

「ええそうです」

「そう。僕もこれから自分のオフィスに向かうよ」

「そうですか」

「きのうは楽しかったよ」

「そうですか」

「それだけ言いたかったんだ」

「わざわざご丁寧にありがとうございます」

「それじゃ」

「はい、失礼します」

電話はきれた。気がつくとき、私はすっかり汗をかいていた。きのうの夜の事をここで思いだすのは、余りにはしたくない。けれど……。

「失礼します」

秘書の女の子が入ってきた。

「お早うございます。今日のスケジュール表です」

勿論自分でもスケジュール管理はしているのだったけれど、他のスタッフとの調整の為に、対外的なところは彼女に管理してもらっている。

「ありがとうございます」

「素敵ですね、チャンネルですか？」

「えっ？」

「そのスーツ」

「ああ、これ。残念ながら違うわ。よく似てるけど」

「そうですか。でも部長が着るとチャンネルに見えます」

「ありがとうございます」

私はコンピューターのモニターに向かった。

秘書はまだ立っている。

「まだ、何か？」

「いえ、その大した事じゃないんですけど、部長、きのう経営コンサルタントの林さんとお食事されたんですよね」

「ええ」

「どうでしたか？」

「どうって？」

「だって、林さんですっごく格好いいし、おしゃれだし、お金持ちだし」

「まあね」

私は微笑した。

「でも、きのうは経済の話しかしなかったわよ。残念なから」

「そうなんですか」

「そうよ」

「あの、林さんてまだ独身なんですよね」

「そうみたいね」

「結婚はしないんですか？」

「さあ、多分関心ないんじゃないの。忙しすぎて」

「そうなんですか」

少し不満そうだった。

「さ、もういいから仕事、仕事」

「はい」

あきらめて秘書は自分の持ち場に戻っていった。

私は再びモニターに向かった。しかし、なかなか仕事に集中できなかった。

土曜日の朝、主人がパジャマ姿のまま、寝ぼけた顔でキッチンに入ってきた。

「お早う。随分ゆっくりと寝てたのね」

「ああ。二日酔いだ」

「それ、いつも言っていない？」

「年のせいかな。そんなに飲んでないんだけど」

そういいながら、椅子に座ると、テーブルの上の経済新聞を開いた。

「コーヒーいる？」

「ああ」

私はコーヒーマーカーに出来ていたコーヒーを注いだ。

「あと、デニッシュパンがあるから。良かったら食べて」

主人は新聞から目を上げた。

「うまそうだな」

「そうでしょ、仕事の合間にデパ地下で買ったのよ」

「よくそんな事思いつくな」

「一応主婦ですから」

「どこか行くのか？」

私のスポーツウエアを見た。

「ジム」

「そうか」

「あなたは？」

「月曜日までに提出しないといけない書類があるんだ」

「それで？」

「明日はアニキの家に行く予定だから、今日やっておくよ」

「ああ、そうだったわね。新築祝い」

「忘れてなかったか」

「うん」

少し気の重い予定ではあった。

「じゃあ、ちよつと一汗かいてくるけど、昼までには戻ってくる予定だから」

「わかった」

再び新聞に視線を戻していた。私は黙って家を出た。

エアロバイクを漕いでいた。土曜日の午前中だというのに、かなり混んでいた。皆、カラフルなウエアに身を包み、マシンエクセサイズをしていた。

「どうですか？」

若いインストラクターが私に声をかけた。

「順調よ、お蔭様で」

インストラクターは私のマシンの走行距離を見た。

「がんばっていますね」

「ええ、もうちよつとがんばるわ」

「あまり無理をしないように」

「大丈夫、ご心配ない」

ポケットで携帯が鳴り出した。インストラクターは黙って姿を消し、私は電話を受けた。

「もしもし」

「今、どこ？」

彼からだった。

「今ジムよ」

「そうか。もし良かったらお昼でも一緒にどうかなと思って」

「珍しいわね。あなたが暇なんて」

「いや、ちょっとキャンセルになった約束があったんで」

「じゃあ、私はその人の代わりってワケ？」

「そうゆう訳じゃないさ」

「まあ、いいわ。特に私も予定がないから」

「そう、じゃあ、十二時にホテルのロビーで待ってる」

「わかった」

彼との電話を切ると、すぐに今度は自宅へ電話した。

「あなた」

「ああ」

電話の向こうでパソコンのキーを打つ音が聞こえた。

「レポートは捗ってる？」

「まあまあね」

「ごめん、偶然、昔の友達と会って、一緒にランチしようって事になったの」

「セレブランチか」

「そんな事ないわよ。ただのランチ」

「まあいいさ。勝手に何か食べておけばいいんだろう？」

「ごめん、そうしてくれる？」

「ああ」

私は電話を切ると、周りを見回した。幸い、私の会話に注意を払っているらしい人はいないようだった。

エアロバイクから降りると、汗を拭いた。

カウンターの前を通ると、先ほどのインストラクターがいた。

「もうお帰りですか？」

「ええ、シャワーを浴びて帰るわ」

「お疲れ様でした」

「疲れてないわ」

私はそのままロッカールームへ向かった。

「お待たせ」

彼はロビーの深い椅子にすわっていた。真っ赤なポロシャツを着ていたので、遠目にもすぐにわかった。

「やあ」

右手を挙げて私に合図をした。パフォーマンスなのだろうか、いつもジェスチャーが派手だ。

「僕も今来た所さ」

「そう」

「行こうか」

彼は立ち上がって歩き始めた。

私たちは、いつも別の所で会うようにしている。その方が顔を覚えられにくい。その割には、彼は、どこにどんなレストランがあるか、わかっている。

今日もフランス料理の店にはいった。予約してあったのか、店の奥の席に案内された。

「今日は朝から運動かい？」

「ええ、まあね。きのうお客さんとお酒の席があったから、その分のカロリーを消費しようと思って」

「へえ、君も大変だね。で、実際どこに行ったんだい？」

「うん、まあ、最初は京料理の店に行って、それから、お客さんの馴染みのスナックに行っただけ」

「それで、デュエットとかしたんだろう？」

「まあね。でも、若い女の子も連れていったから」

「いや、僕だったら君とデュエットするよ。」

色気が違うから」

「ありがとう。それであなたは何をしていたの？きのうの晩」

「同じだよ。お客さんの接待」

「そう。なんか、私たちって同じような事してるのね」

「前も言ったろ、僕らは似たもの同士なんだって」

「同感だわ。あなたと二十年前にお会いしたかった」

「そしたら今頃僕と暮らしているかい？」

「いいわね」

「いいね」

私は彼の瞳を見た。しかし、そこには何も映っていなかった。

「やめましよう、むなしくなるわ」

「何でだい？本当にそう思っているのに。反対に君に新しい恋人が出来ないか、心配している位さ」

「新しい恋人？」

「ああ、いないのかい？」

彼は運ばれてきた食前酒を口に運んだ。

食事が始まる前から会話がとぎれなかった。

「そう言えば」

「そう言えば？」

「いえね、新入社員の男の子がいてね、おかしいわね、その子も名前が林って言うの。今の今まで気がつかなかったわ」

「それで？」

「お客さんが、酔っ払って私に抱きついてきたら、真剣に怒ってくれて。ちょっと感激したわ。純真な子なんだなって」

「君の事好きなんだな」

「まさか」

「そうに決まってるさ」

「でも、私より二十は年下かしら。大学でたてだから」

「年齢は関係ないさ」

「もしかして嫉妬している？」

「いや、別に」

「そう。なんか矛盾してるわ」

「そうかい？」

「もういいって」

「ところで突然だけど、来月の最初の週って空いてるかい？」

「平日？」

「そう」

「仕事だけど、何？」

「いや、あのいつもの経営クラブの親方たちが、香港に視察に行くっていつてるんだ。それで僕も行くことになって」

「それで？」

「君も一緒にこないかなと思って」

「でも、仕事なんですよ」

「ああ、けれど、べったりお供をしなくてもいいさ」

「そう」

「君と香港で中華料理を食べるなんて楽しそうだ」

「そうね」

一瞬、彼と香港の料理店で飲茶を食べている自分の姿が目には浮かんだ。自分はチャイナドレスを着ている。

「もし、仕事の都合がいたら一緒に行きこう」

「考えておくわ」

「ああ」

マンションの鍵を回した。

リビングの電気がついている。

「あなた、ごめん今かえったわ」

返事はなかった。

書斎に行くと、まだ主人はパソコンの画面を睨んでいた。

「あなた」

「ああ、今帰ったのか」

「そう言ったけど、聞こえなかった？」

「聞こえなかった」

心ここにあらずという感じだった。

「お昼はどうしたの？」

「インスタントラーメン作ってたべたよ」

「もっといい物食べたらよかったのに。近くにいくらでもレストランあるじゃない」

「一人でいっても面倒臭いだけだ」

「そう、ごめんなさい」

「別にいいさ」

私はリビングに戻ってキッチンを覗いた。そこには、汚れた鍋や、食器が乱雑に置かれてあった。

こうゆう時には罪悪感にかられるべきなのだろうか？

私はすぐに汚れた食器を洗いだした。

「こんにちわ、洸君」

義兄の家の玄関をあけてくれたのは、甥っ子の洸だった。

「こんにちわ」

少し照れくさそうに返事をした。

「随分大きくなったのね。もう、大人じゃない」

それには返事をせずに家の中に案内してくれた。

「いらっしやい。遠いのにありがとうございます」

義姉が中から出てきた。姉と言っても実は私と同じ年だった。けれど、知らない人がみたら、やはり姉の方が年上だと思うだろう。

「いえいえ、今、洸君が玄関あけてくれて、大きくなったのにびっくりしました。もう大学生？」

「来年です。今は受験生だから」

「そう大変ですね」

「大変なんですよ。どうぞ、こんな所に立っていないで中に入ってください」

「ありがとうございます」

中に入ると、大きな座卓があり、もう、沢山の食べ物が置かれていた。

ちょうど上座にあたる部分に主人の母が座っていた。義兄の家族と暮らしている。

「どうも」

主人が言葉少なげにいうと、母が嬉しそうな表情を見せた。

「お母さんどうですか？新居の生活は」

耳が少し遠いので、どうしても大きな声になる。

「ああ、いいですよ。とつても。智子さんも今日は来てくれてありがとう」

「いえお祝い事ですから」

私は義兄の家を見回した。新しい、きれいな家だった。よく住宅展示場にあるような。きっとこの一家の自慢に違いなかった。

「いらっしやい」

義兄が窓から声をかけた。

「いったい何してるんだ？」

主人が立ち上がって、窓の所まで行った。

「いや、庭の手入れさ。野菜でも植えようと思って」

「へえー、どこだい？」

「あそこだ」

まだ、植栽が整っていない庭の一角に掘り起こされた地面があった。そこに、たよりなさそうな苗がいくつか植えてある。

「いいなー。うまいもんが食べそうだ」

「期待しとけよ。出来たら、売ってやるから」

「いらないよ」

そう言いながら、主人はうらやましそうに、その庭の一角を見ていた。

少し意外だった。いつもは経済新聞を読み、仕事をする事を生きがいに感じているような主人が、野菜を育てる事に関心を持っているなんて。

「今日は悪かったな」

帰りの電車の中で主人がつぶやいた。

「なんの事？」

窓から見える家々の光をぼんやりと眺めていた私は、振り返って顔を見上げた。

「お袋がかなりしつこかったからさ」

「ああ、その事。いいのよ全然気にしてないから」

私は長い髪を振り払った。

「全然気にしてないか・・・」

「だって、そうじゃない。あなたのお母さんの言う事を一々気にしてたら身がもたないわよ」

「とりようによっては、悪口にも聞こえるが」

「私がいつあなたのお母さんの悪口を言った？」

「いや」

「とにかく、出来ない物は出来ないんだから、仕方ないじゃない。本人がそれで納得しているのに、それを回りの人がどうの言ってもどうにもならないって」

「どうにもならないか・・・」

「どうにかなったとでも言いたいのか？」

「いや、別に」

「じゃあいいじゃない。あなた本当に悪かったと思ってそう言ったの？それともあなたもお母さんと一緒の事を考えていたとか？」

「悪かった。もうこの事は話すのはやめよう」

「そうね、それが賢明だわ」

「うん」

「そうだ、来月の一週目に、もしかしたら仕事で香港に行くかもしれないの。いいかしら？」

「仕事？」

「ええ、お客さんについて行くかもしれないの」

「仕事だったら仕方ないじゃないか。わざわざ聞く事もない」

「そうね、あなたもどうせ毎日午前様だから」
再び窓の外を見ながら考えた。もし、自分が結婚した時に仕事を辞めていたら、今頃どうしているだろう。

皆が期待しているように、子供がいたら、それはそれで良かったのかもしれない。でも、今と同じで、夫婦だけだったら。ただ主人の帰りを待つだけの人生だとしたら。

やはり自分にはそれは似合わない。

それに、もう過去には遡る事はできない事を皆が知っている。だから、いくら義理の母が何と言おうと、それは全くの無駄なのだ。

「はー疲れた」

「部長、珍しいですね、部長が音を上げるなんて」

会議室にまだ、人が残っていたのに私は気がつかなかった。

「林君、まだそこにいたの？」

「はい」

私は顔を少し赤らめた。誰もいないと思って全く緊張を解いていた。

「お客さまも頑固ですよ。少しはこっちに歩み寄ってくれてもいいのに」
「仕方ないのよ、顧客なんだから」

「がまん強いんですね」

「まあね。ずっとこの仕事しているから」

「部長、この書類を至急作りなおしたらいいんですね」

「やってくれるの？」

「はい」

「気がきくのね」

「どのでもないです」

そう言うと、林君は会議室から出て行った。

気のせいか、最近は背広姿が似合っている。

それにしても、いったい何故ここに残っていたのか。私をねぎらおうと思っていたのか。

「ううん。きっと可愛い彼女がいるに決まっているわ。もしかしたら大学生かもしれない」

一瞬でも変な考えを持った自分が恥ずかしくなった。

「これ、もういらないからシュレッダーにかけて」

秘書に会議の書類を渡した。

「はい。随分長い会議でしたね」

「そうなの。それに、また全部見積もりやり直し」

「そうですね。難しいお客さんですね」

「うん、まあいいから、シュレッダーかけておいて」

「はい」

秘書が出ていこうとした後ろ姿に私は声をかけた。

「そうだ、来月の一週目に私、休んでもいいかしら」

「来月ですか？」

「そうなの。急に主人と旅行でも行こうかと思って」

「もう予定はつまっていますけど・・・。調整できるか見てみます」

「悪いわね、お願い」

私はコンピュータの電源を入れた。

画面をぼんやり眺めながら考えていた。

「本当に彼と香港に行けるのかしら？」

仕事中にそんな事を考えるのはいけないのは重々承知している。

それでも、逃避したい気持ちはどこかにあるのかもしれない。特に、気が滅入る事があつた時はそうだ。

メールソフトを立ち上げて、チェックした。

彼からのメールは来ていなかった。

「この間会ったのは土曜日だし、それから音沙汰なしね」

少し寂しいような気もしたが、いつもの事だった。

ほんの2、3行、メールを打つ事くらい、または、ほんの三十秒電話する位してくれてもいいのに、と思わなくもない。

でも、仕事が忙しくなると、すっかり私の事は忘れてしまうようだった。

「君、困るじゃないか」

何の予告もなしに、部長がパーティションの中に入ってきた。

「旅行に行くなら、休みの日にしてくれたまえ」

「えっ」

「たまたまそこを通りすがりに君の秘書と話したら、なんでも旅行に行くから顧客との会合をキャンセルしようとしているそうじゃないか」

「いえ、その」

「違うのか？」

「済みません」

私はうつむいた。

「小学生ではないんだから、私的な事を優先するのはやめるように」

「わかりました」

汗が全身から噴出すようだった。

「お願い恥ずかしいからやめて」

私は薄暗闇の中でつぶやいた。

「何で？」

ベッドの下の方から彼の声が聞こえた。

「だって、恥ずかしいわ」

「今までした事なかったのかい？」

私は答えなかった。

彼は体を起こし、私の頭を両手でかかえた。

「かわいいそうに」

そう言うと、唇に口付けをした。それも舌が次第に奥深く入っていく。

彼の手が私の体のありとあらゆる部分に触れた。

気が遠くなっていくようだった。

「どっちがいい？」

耳元でささやいた。

「どっちがって？」

「君のダンナとき」

急に主人の顔が目の前に浮かんた。

「そんな事聞かないで」

顔を横にそむけた。

「聞いたら悪かったかな」

私の返事を全く気にしていないようだった。

彼の腕枕で私はじっとしていた。お互い裸の皮膚が触れ合っている。

「あの香港の事だけど」

「ああ、あれ、やっぱり君を連れていくのは無理だ」

「えっ？」

「じいさん連中がさ、非公式でコンパニオンの女の子を連れて行くって言い出してさ。だから、そんなのと一緒にしたら失礼だろう」

「そうだったの」

それならどうしてもっと早く言ってくれなかったのか、そう言いたい言葉を呑み込んだ。「わざわざ連れていかなくても現地調達すればいいんだ」

「現地調達？」

「そうさ、現地で調達するんだ」

私はため息をついた。男社会の中でずっと働いてきたけれど、今だにこの手の話は理解できない。いや、理解するのを拒んでいるのかもしれない。

男は所詮男なんだから……。

「さ、もう行くよ」

「もう？」

たった今情事が終わったばかりだというのに、いったい何を考えているのだろう、そう思わされる事がいつもだ。

「また早朝会議？」

「いや、違う。レポートを至急仕上げないといけないんだ」

「そう大変なのね」

せいぜい皮肉っぽく言っただつてもりだった。

「ああ、仕事をしないと食べていけないからね」

「まさか」

「本当さ。いつ君に嘘を言った？」

「それじゃ、お休み、シンデレラ」

彼は私の額に軽くキスをした。

「部長見て下さい、これ」

秘書が持ってきたのは写真情報誌だった。

「何？」

作業が中断されたので、少し機嫌の悪い声を出した。

「ごめんなさい、お邪魔でした？」

「いいわ、それで何？」

「これ、林さんが写真に載っていたんで、あの経営コンサルタントの」

「ああ、見せて」

出来るだけ平静な様子を装った。

写真には成田での到着ロビーの様子が移っていた。

大物政治家や、経営者の後に、彼の姿があった。

「さすがですね。林さん。僕は引き立て役ですよ、なんていつも言ってるながら、しっかりと写真に収まってる」

「ええ」

私の目は、彼の後ろに見える女性の姿に釘つけになっていた。

「何みてるんですか？ああ、その女の子、何だかきれいですよね。女優さんかしら。知らないけど。もしかしたら林さんの彼女かしら」

「さあ、そうかもね」

「一緒に視察に連れていくなんて隅におけませんね」

「本当」

私は顔がひきつっていないか気になった。

もう一度写真を見た。気のせいか、その女性が彼に連れ添って歩いているように見えた。

「彼女・・・」

あまり聞きたくない言葉だった。

「今帰ったぞ」

寝室のドアが開き、外から光が入ってきた。

「今帰ったぞ」

主人の怒ったような声があった。

「わかったって。わざわざ起こさなくても・・・」

背広姿の主人がそのままベッドに倒れこんだ。

「お酒臭い。よっぽぼど飲んだのね」

「ああ」

主人の手が私の体の上ののった。

私はそれをそっとはずした。

「そんなに嫌がる事ないじゃないか」

「嫌がってるワケじゃないけど」

「最近やってないな」

手が再び私の体の上に乗ってきた。私のネグリジェを探っている。

「あなた、酔っ払っているのよ、やめましょ、そんな時に」

「酔っ払っていいようが何だろうが、いいじゃないか」

声がだんだんすごんできた。普段は穏やかな人なのに。

「それともオレとやるのがいやなのか？」

「そんな事ないわよ」

「会社に誰かいるのか？」

その質問に少し安心した。

「いないったら。どうしたの、あなた今日はおかしいわよ」

「本当にいないのか」

いつの間にか手は私の体の上から、首筋に移動していた。

主人が私の上に乗るかかっている。

「やめて」

次第に手の力が入っていく。

「苦しいじゃない」

「本当に男はいないのか？」

「いないわよ」

だんだん首が痛くなってきた。

「本当か」

「いない」

あまりにも、主人の力が強かったので、本当にここで死ぬのかと思った。

それもふさわしのかもしれない。今の私には。

「いないから、放してお願ひ」

もうそう言うのがやっとだった。目からは自然と涙が出た。

「ああ」

うめき声とも叫び声ともつかない音を出すと、主人は手を離して、そのままベッドの上に転がった。

私は手を喉にやった。

席が出てきた。

立ち上がるとそのまま寢室を出た。

洗面で鏡を見ると、うっすらと首が赤くなっている。

ひどくみじめな気持ちになって涙が止まらなかった。

あのまま寢室で窒息死していた方が幸せだったかもしれない。

これ以上の苦しみを味わなくてすむという意味では。

「部長、元気ないじゃないですか」

セミナーの終わった後に、誰かが肩を叩いた。

振り向くと、それは彼だった。

「ああ、あなた。部長はやめて」

他の人の耳を意識しての事なのはわかる。でも今の自分は演技する気にはなれなかった。

「もしよかったらその喫茶店でコーヒーでもいかがですか？もしお急ぎでなければ」

「ええ、社には戻らないといけないのだけど、コーヒーだったらお付き合いさせていただきます」

「よかった。私も夜には、顧客の所で打ち合わせがあるんです」

「そう」

私たちは同じ建物の中にある喫茶店に入った。

彼はセミナーで講演をした側なので、他の人たちが挨拶をする。

「コーヒーを二つ」

席につくなり、ウエイトレスに注文した。

「どうした？」

他の人達の聞こえる範囲外である事を確認してから、全く違う口調で私に尋ねた。

「どうもしないのよ、ちょっと夫婦喧嘩をしただけ」

「そう。あんまり深刻な喧嘩ではないといいけど」

「違うわ、大丈夫」

私にそういわせたかったに違いない。

「それより今日はあなたに聞きたい事があるの」

「何だよ」

急に表情が固くなった。

「本当の彼女はいるの？」

「本当の？」

「ええ、だから結婚していない彼女」

「いる」

「えっ？」

それ以上何も言えなかった。全く予期してなかったと言えば嘘になるだろうか？

「どうして最初に言ってくれなかったの？」

「だって聞かなかったじゃないか」

「……」

本当はその彼女はどんな人で何歳で、いつどこでどれだけ会うのか、聞きたかった。しかし、それは自分のプライドが許さなかった。

「じゃあ、私は必要ないのね」

「必要だ」

「うそ」

「そうだ。それに君も僕が必要だ、そうだろう？」

「ええ」

急にいてもたってもいられないような気持ちになってきた。

「ごめん、もう行くわ」

「コーヒーをお持ちしました」

ウェイトレスがトレーに重そうに二人分のコーヒーを持ってきた。

私はそれを見ただけで、何もいわずに席を立つと、そのまま喫茶店を走り出た。

「それでその彼は何歳？」

私は高校時代の親友と有名なフランス料理店に来ていた。

「三つ年下」

「そう。でも今までご主人とうまくやってきたんだから」

「うん」

魚料理を食べるために握ったフォークの動きが止まった。

「その人、何してるの？」

「コンサルタント」

「ふーん」

格好いいスポーツカーに乗っているのよ、と自慢したくなった。けれども、何も言わなかった。

「じゃあ、収入はいいのね」

「うん」

「ご主人よりも？」

「はっきり聞いた事はないけど、多分」

「でも微妙な所だわ。ご主人だって、一流企業に勤めているんだし」

「わかっている」

確かに彼は今は仕事が順調にあるらしい。だからと言っていつまでも順調に続くとも限らない。

「ご主人と別れてって言われた事はないの？」

「ないわ。一度も。その事について話した事は一度もないの」

いつの間にか魚料理は下げられ、次に肉料理がやってきた。しかし、私は完全に食欲を失っていた。

しかし、親友はナイフとフォークを持ち、目の前のステーキと格闘し始めた。

「おいしい、食べないの？」

「うん、食べる」

私は形だけ、小さく肉を切り分けると、口に持っていった。

「それに他にも彼女がいるみたいなの」

「何それ？」

「こないだ聞いたらいるんだって、私の他に」

「あなた利用されてるのよ、それ」

友人の言葉にうなだれた。一番聞きたくない言葉だった。

「あなたが、立派に出世しているキャリアウーマンだから、関心持っただけなのよ」

「確かに最初はそうだったけど」

「早く別れた方がいいわ。ご主人に知れる前に」

もうそれも手遅れかもしれないなかった。

自然と涙が目の端に出てきて、ナプキンで押さえた。

「別れなさいよ」

「だめ」

首を横に振った。

「どうして？」

「どうしても」

「欲張っちゃだめよ。堅実なご主人と、年下の恋人と、二人を握りしめたままだったら、

両方手放す羽目になりかねないわよ」

私は涙が止まらなくなった。

「ごめん、泣いてるの？言い過ぎた」

そう、そこまで言ってくれるのはこの親友しかいないのは知っている。それでも、彼女がどう思っているかを聞くのは、つらいものがあった。

気まずい沈黙のあと、友人は皿の上のステーキを平らげた。

コーヒーが運ばれてきた。

涙が止まった私は黙ってコーヒーをすすった。

「あなたがうらやましいわ」

「うらやましいって？」

こんな泥沼に陥っている私がうらやましいって？

「だって、この年になってもそうやって、言い寄ってくれる人がいるんだもの。それだけ魅力があるって事よね」

「でも、あなたこそ、いつもきれいにしているじゃない」

友達はいつもブランド服を身につけ、いかにも山の手の奥さまという感じだった。

「ありがとう。でも、誰も関心もってくれる人はいないのよ。異性として」

「そんな事ないでしょ」

「本当よ。主婦になったらそんな物だって」

「でも、ご主人がいるし」

「それはあなただって同じじゃない。大恋愛の末結婚した最愛のダンナ様が」

「昔ね」

私は友人の顔を改めてみた。

「ねえ、男の人も嫉妬って感じるのかしら？」

「さあ、私は男じゃないからわからないけど」

「けど？」

「本当に愛していたら、感じるんじゃないの？」

「そうなのかしら」

「じゃあ、本当に愛するってどういう事？」

「さあ」

お互いに考えこんでしまった。

「あなたこんな所にいたの」

「ああ」

朝、主人の姿が見えないので、書斎のドアを開けると、主人が部屋の隅においてあるソファーの上に座っていた。

ここで夜を明かしたようだった。

主人は携帯を手に握りしめていた。

私は何をしているのかわからなくて、主人を見つめた。

しばらくしてから、諦めたように、主人が携帯のキーを打ち始めた。

「メールしてたんだ」

「ああ」

「ごめん」

そう言って扉を閉めた。

今まで携帯でメールなどした事がなかったので意外な気がした。

「相手は女、よね」

男同士で朝からメールをするわけがない。

肩をすくめると、キッチンで目玉焼きを焼き始めた。いつもあまり主人の事をかまっていなかったのだから、罪ほろぼしに、朝食でも作ろうと思ったのだ。

「お、いい匂いがするな」

「うん」

何くわぬ顔で出てきた主人は、テーブルについた。

私はできあがった目玉焼きを皿に載せると、目の前に置いた。

「コーヒー飲む？」

「うん」

私は自分の分と二つのカップにコーヒーを注ぐと、自分もテーブルについた。

「この間は悪かった」

「何の事？」

「酔っ払って帰ってきた時の事さ。よく覚えていないけど、君にひどい事をしたような気がして」

「もう、すっかり忘れているのかと思った。本当にお酒臭かったから」

「ああ、でも酒で記憶を失ったりしない方なんだ」

「そうだったかしら」

「とにかく悪かった」

「別にあやまってもらわなくてもいいわ」

首を絞めようとした事には変わりないのだから。

「そうか、良かった」

主人は朝食を食べ終わると口の周りをティッシュで拭くと、席を立った。

「そう言えば、今日出かけるから」

「え、日曜日なの？」

「ああ、散歩にでも行こうと思って」

「散歩」

一人で日曜日を過ごさなければならなかった。

主人が出かけてしまっただけで一人になった私は家で家事をした。朝食の後片付けをして、洗濯をして、掃除機をかけた。

そうしているうちに、今まで心の中で蓋をしていたある事実が心にひしひしと浮かんできた。

彼には別に彼女がいる。私がこうやって掃除機を掛けている間にも、彼は今頃、彼女とドライブでもしているかもしれない。

今までは私が家庭を持っていてから遠慮して日曜日は連絡してこないのだと思い込んでいた。しかし、事實は、週末は私の事などすっかり忘れて、彼女と楽しく過ごしているんだ。

「じゃあ、いったい私は何？」

思わず大きな声で叫んでしまった。会っている時は、あんなに情熱的で優しい言葉をかけてくれるのに、その言葉は全部、作り物だとしたら。

掃除機を握りしめたままその場に立ち竦んでしまった。

単に遊ばれている。年下の男に言い寄られていい気になっていた私。

でも、本当に好きでもない女に優しい言葉をかけるだろうか？一緒に時を過ごすだろうか？夜を過ごすだろうか？

もしも、全く関心がなかったら、目もくれないに違いない。

そして、肝心の自分のダンナは、隠れるように、こっそりと家を出て行ってしまった。

「いったい何をしているのかしら？」

もし、他の女性と会っているのだとしたら、自分は髪の毛を逆立てて、怒りまくるのが、正当なのかもしれない。しかし、そんな気持ちには到底なれなかった。あまりに長い時を一緒に過ごしすぎたのかもしれない。

それよりは、彼の彼女の存在の方が今の私には苦しい。

しかし、次に会った時には、さも何事もないように、明るい自分を演出しないといけないのはわかっていた。

揉め事は嫌いなのだ、彼は。今は一瞬でも動揺を見せてしまった事を後悔している。

「何だか疲れたわ」

掃除機をクローゼットにしまうと、洗面所に行き、キャビネットを開けた。そこには、神経が高ぶったときに服用する睡眠薬が置いてあった。

蓋を開けると、いつもよりは多めにとって、口に入れた。蛇口をひねるとコップに水をため、薬を胃に流しこんだ。

そのまま寝室に行くと、ベッドの上に倒れた。薬の作用というよりは、今までの疲労感で底なしの眠りに引きずられるようだった。

「おい、晩飯は？」

主人が私の体を揺り動かした。

それはわかるのだが、体が言う事をきかない。言葉も発する事ができない。

「何食べたらいいいんだ」

私は身動き一つしなかった。

主人は私の様子を少し伺ってから、あきらめて寝室を出ていった。

「おい、朝だぞ。会社にいかなくていいのか？」

目を開けると、背広姿の主人が立っていた。

ベッドの上で起き上がろうとしたが、眩暈がしてまた横になった。

「ちょっと無理みたい」

「そうか」

私は腕を自分の顔の上に置いた。立ち上がって電車に乗る事すら考えられない。

「会社に電話しようか？」

「自分でするわ」

「そうか？」

「ちょっと待ってて」

自分は枕元においてあった携帯を取ると、秘書の番号を押した。

「今日は具合が悪いので休みます」

それだけ言うと、電話を切った。

「電話したのか？」

「留守録」

「そうか。じゃあ、行ってくるよ」

「うん」

少しは心配してくれているようなのが、嬉しかった。

そして、また眠りに落ちた。

次に目が覚めると、もう昼すぎだった。

私は携帯を手にとった。着信もメールもなかった。

前に彼から連絡があったのはいつだったか？私は着信記録を見た。

「誰？」

急に寢室のドアが開いて、びっくりした。

「オレだよ」

「あなた。どうしたの？会社じゃなかったの？」

「気になって半日で帰ってきたんだ」

「もしかして私の為に？」

「ああ、たまたま何も会議が入ってなかったから」

「そうありがとう」

主人は黙って寢室のドアを閉めた。

「今日はオレが晩飯作るよ」

「そう？どういった風の吹き回し？」

「風？いやたまには作ろうと思って」

「じゃあ、お願いするわ」

私はまだ気だるい体をひきずってシャワーを浴びた。

お湯を浴びながら、自分の顔を鏡でよく見た。

茶色の瞳が見える。さらに近づいて、その瞳の中を覗きこんだ。しかし、何もそれ以上は見えなかった。

主人は家にいなかった。買い物に行ったらしかった。一人で食料品を買い出しに行く事事態が珍しい。

「いったいどうしたのかしら」

主人の中で少しずつ変化がおきているようだった。

私は電話を取り、会社に電話した。

「今日はごめんなさい。私がいなくても大丈夫だったかしら」

「はい」

電話の向こうから明るい秘書の声が聞こえてきた。

「明日の顧客との会議はどうされますか？」

「明日はいけそうよ。ずっと寝てたから何とか・・・」

「そうですか、本部長も心配されていたみたいで」

「本部長？」

思い出したくない人を思い出してしまった。また、あの人と顔をあわせると思うと気が少しだけ重いのがあった。

「ええ。それから、林君が明日の会議の資料を作ったって持ってきたんですけど。ご覧になりますか？」

「林君が？そう。それは有難いわね」

「じゃあ、ファックスで送ります」

「ありがとうございます」

寝室に行って、服を着替えていると、居間の方でさっそくファックスが動きだした。

「また仕事か」

スーパールのナイロン袋を下げた主人が戻ってきた。沢山買出ししていたらしい。

「ごめんなさい。後にするわ」

何枚にもわたる資料に目を通すのに時間がかかっていた。

「具合が悪くて休んでいたんだから、仕事するのはやめといたらいいんだ」

「それもそうね」

私は書類を仕事のカバンの中にしまった。

「もう、いいのか？」

主人は食料品を冷蔵庫にしまっていた。

「ええ、大分良くなったわ」

「そうか、それはいい」

「一緒にご飯作ろうか？」

「ああ」

「じゃあ、乾杯」

「乾杯」

私たちはグラスに注いだワインを飲んだ。

「何か病氣の日に食べる食事じゃないわね、これ」

目の前には、ステーキがまだ音を立てていた。

「でも、もういいだろう」

「ええ、まあ」

「実は最近考えていた事があって」

「何？」

「いや、兄貴の家に行って一戸建てに済むのはいいな、とって」

「でも、東京で一戸建てに住もうと思ったら大変よ」

「わかってる。だから、地方に転勤したいんだ」

「地方！」

私は絶句してしまった。今の自分の仕事では地方に転勤など考えられない。

「いや、いつかは定年前に地方に行くらしいんだが、幸い僕らには子供もいないから、教育問題も考えなくていいし」

「それで？」

「だから君さえ良ければ、早めに地方に転勤願いを出してもいいかな、とって」

「そんな」

「ま、ステーキが冷める前に食べよう」

「ええ」

先日の一件で、主人が私の事を疑っているのは、想像できた。

それで、彼と手を切らそうと思って、急にそんな事を言い出したのか、それとも本当に土いじりをしたと思うようになったのか。「何だか早すぎるわ」

肉をほおばりながら、私は言った。

「何が？」

「だって、お兄さんみたいに庭で野菜を作ったりしたいって言いたいんですよ」

「ああ」

「もっと年とってからでもいいんじゃない」

「もう、若くはないからな、お互い」

「そう」

主人と私は同じ年だった。

「ただいま」

「お帰りなさい」

私は自分の席に戻ると、外で買ってきたコーヒーを机の上に置いた。

荷物を奥と、そのまま呆然とコーヒーを口にしました。

「失礼します」

秘書が立っていた。

「何？」

私は顔を上げた。

「あの、朝から部長に繋いでくれっていう電話が何度もかかってくるんです」

「誰？」

「さあ、名前を聞いても言わないんですけど、女の人です」

「女の人？」

「ええ、声は若い感じでしたけど」

「そう。あんまりしつこいようだったら、一回お話するから、今度かかってきたら、繋いでちょうだい」

「はい、あの」

「何？」

「今もかかっているんですけど、いいですか？」

「今？」

声が思わず不機嫌になった。外回りから帰ってきたばかりだったから。

「あの、じゃあ、次にします」

「いいわ、出るから、電話回して頂戴」

「はい、あの、保留になっているんです」

「そう」

私は受話器をとった。

保留ボタンを押す。

「もしもし」

「・・・」

「あの、何か」

「彼と別れて下さい。それだけ言いたかったんです」

「何ですって？」

私は秘書を見た。心配そうにこちらを見たままだった。向こうにいけとも言えない。

「あの、何かの間違いでは。ここは会社ですけれど」

「間違いじゃないわ。家の番号を教えてもらえなかったから、ここに掛けているの。迷惑だとは思ったけれど、それしか方法がなくて」

「でも、いったいどういったご用件が見等がつきませんが」

「しらばっくれないで。わかっているんですよ」

私は背筋が寒くなった。いったい彼と私との事がどれだけ知れ渡っているのだろう。

「きのう、奥さんが病気だからって会社を早退してしまってどれだけ苦しかったか。その時気がついたんです。私どれだけ、愛しているのかって」

「あなたのいう彼って・・・」

「ご主人の事です」

「そうなの」

事実を把握するのに、しばらく時間がかかった。この電話の向こうの女は、彼の彼女ではなくて、主人の彼女、つまり不倫相手らしいのだった。

「本当に知らなかったんですか？」

「知りませんでした」

「じゃあ、びっくりしました？」

「ええまあ」

「じゃあ、ここではつきりいますけど、私はいつまでも、こそこそしているのはいやなんです。だから、別れて下さい」

「そう簡単にはお返事できません。決めるのは主人ですから」

「じゃあ、別れてくれるんですか？」

「そうは言いませんけど。とにかくどうゆうつもりか聞いてみます」

「そうして下さい」

電話は一方的に切れた。

私は秘書の視線を感じて顔を上げた。

「ごめんなさい、恥ずかしい所をお見せしてしまって」

「いえ、私もお電話回してよかったのかどうか気になって・・・。ご主人がどうかされたんですか？」

「主人の女からよ」

「すみませんでした」

「あなたがあやまる必要はないじゃない」

「いえ、その。絶対誰にも言いませんから」

「ありがとう気を遣ってくれて」

「失礼します」

秘書が去ってから、疲れがどつとやってきた。自分の人生は今まさに、めちゃくちゃになるうろとしてしている。

「助けて」

コーヒーを飲みながら、無表情に呟いた。

誰も聞いてくれる人もいないのに。

立ち上がって窓から外の景色を見た。人々は何事もないように急ぎ足で道を歩いている。

車達も軽快な音を立てて、走りさっていく、ように見えた。

深呼吸をした。

「別にかまわないわ」

主人が別れたらというのなら、それもかまわない。昔の恋愛感情が去ってしまったのは、お互い様だから。

それよりも、別れてくれと電話をかけてくれる女の気持ちが出来なかった。自分だったら、決して、そんな事はしないのに。

「男は追いかければ追いかける程、逃げていく物なのよ」

急に自分の方が賢い人間のように思われてならなかった。

内線が鳴った。

「はい」

「すみません、本部長が今日の会議の結果を知りたいって今、連絡があったんです」

秘書の声だった。

「わかったわ。悪いけど、林君に私の所に来るように伝えてくれない？」

「わかりました」

本当なら、一人で本部長の所に行くべきなのはわかっている。けれど、本部長は苦手だった。誰かを連れていけば、クッション代わりにしてくれる。だから、誰でもいいのだけれども。

カバンから、きのうファックスで送られてきた書類を再び出した。

今日の会議の為に、わざわざ作ってくれた資料だった。

「新入社員とは思えないわ」

「何がですか？」

気がつくつと、当の林君がパーティションの入り口に立っていた。

「いえ、資料が良くできていたから」

「ありがとうございます」

私はじっと目を見た。履歴書を見る限りでは、まだ二十代。それにしても、随分落ち着いている。

「こちらこそ、ありがとうございます。私が休みの時にがんばってくれて助かったわ」

「いえ」

「実は本部長の所に報告に行かなくてはいけないのだけど、一緒に来てくれる？」

「はい」

林君は私の部屋の外側で待っていた。私はその間に必要な書類を整え、少しだけ身だしなみを直した。

若い恋人を持ったらどんな気分なんだろうか？一瞬だけそんな思いが頭を過ぎった。

「お待ちせ」

私たちは長い廊下をあるくと、つきあたりにある、本部長の部屋と扉を叩いた。

「はい」

中から本部長付の秘書の声がした。

「すみません、先ほどの顧客会議の報告に参りました」

部屋の中を歩く音がして、いきなり、本部長が扉を開けた。

「遅いではないか」

「すみません」

本部長は私たちを不審そうに見た。

「すみません、あの、今回の資料作りをした新入りの林君です」

「そうか」

なおも、不審そうな顔をしている。

「ごめん、悪いけど席に戻ってくれる？」

「はい」

林君は軽く頭を下げると今来た廊下を戻っていった。

「何で、報告に一人でこれないんだ」

「すみません」

「子供ではないんだぞ」

「わかっています」

「まあいい。報告を聞こう」

「はい」

私は資料を開くと、説明を始めた。

「ですので、私共の提案するシステムに一応お客様も合意していただきました。これから
は先は技術者レベルと細かな打ち合わせになるかと思えます」

「それで契約はとれたのか？」

「いえ、それはまだ」

「どれだけ時間をかけたら気が済むんだ。一日でも早く契約を取ってこい」

「はい」

こうゆう場面も慣れている筈だった。しかし、今日は特につらく感じる。

本部長の部屋を出て、自分の場所に戻ると、外でまだ林君が待っていた。

「まだ、そこにいたの・・・」

「はい、気になったので」

「ありがとう、優しいのね」

私はそのままパーティションの中に入っていった。

「部長、何か言われたんですか？」

目は本当に心配そうだった。

「大丈夫よ。いつもの事だから」

「いつもの事って・・・」

携帯が鳴った。

「もしもし」

「やあ、久しぶり」

それは彼の声だった。

「こんにちわ、お元気ですか？」

私は不自然な位明るい声を出した。そして、林君には背を向けた。

振り返ると、もういなかった。

「今、まづかったかな？」

「ううん、大丈夫です」

久しぶりに彼の声を聞いて、なつかしいような、泣き出したいような気持になった。

「明日の晚会えるかな？」

「ええ」

「そしたら、ベイホテルで待っている」

「ベイホテル？」

「ああ、わかるかい？」

「多分。でも少し遠いわ」

「じゃあ、タクシーで来たらいい」

「そうするわ」

「そしたら明日」

「はい、お電話ありがとうございます」

電話の向こうで笑う声が聞こえた。変な所で取り繕う私が面白いに違いなかった。

次の日は、幸いスケジュールもそれ程つまっていなかった。そんな日が時々なる。そんな時は、そんな時で、たまった資料に目を通したり、であつとゆう間に一日がたっていく。

「部長、お昼どうされます？」

「どうって、いいわお腹空いていないから」

「そう言わずに、何か外で買ってきましょうか？」

「ええ、だったらお願い」

「サンドイッチ、ですね」

「ええ」

最近食欲もなかった。けれど、実際に食事にかけている時間もなかった。

「人間食べなくても何とかやっていける物なのね」

何だか可笑しくなった。若い頃は、いくらでも食べれるように思ったのに。

「それにしても、契約か」

私は椅子に座りながら手を伸ばした。

近日中にまた契約書を持って顧客の所に行かないといけない。それが、一番神経を使う。

「どんな風に言ったらいいのかしら」

勿論担当の営業はいるのだけれども。

昼からは、その営業との最終打ち合わせ等で、会社の小会議室で長い事話を詰めていた。

「あら、もうこんな時間」

私は腕時計を見た。

定時を過ぎていた。

「部長、すみません、長い事お引止めして」

「いえ、大丈夫よ。でも、あとはお願いするわ」

「はい」

どうせその後、男同士で飲みに行くにきまっていた。

「では、お先に失礼するわね」

私は自分の席に戻ると手早く荷物をまとめ、会社の近くでタクシーを拾った。

「ベイホテルまで」

「はい」

寡黙な運転手は無言で車を走らせた。まさか、私がこれから愛人に会いに行くとは思っても

しないだろう。

ハンドバッグの中から手鏡を取り出した。はげている口紅を塗りなおした。それが終わると、また鏡をハンドバッグにしまい、顔を上げた。

「ここは？」

「すみません、ちょっと抜け道です」

そこは明らかにホテル街だった。こんな所にあるとは知らなかった。明らかにこれからホテルに向かう様子の男女も歩いている。

「ちょっと待って、車を止めて」

今、すぐ横を歩いてきた男性がとても自分のダンナに似ているのに気がついた。

ごめんなさい、少しだけ、舗道に寄せてもらえるかしら。

車は舗道に寄って、そのまま停車した。

すぐ横を男女が通っていく。私は顔を伏せながら、横目で見た。

主人だった。

「ここで降ります」

「でも、お客さん、ベイホテルに行くんじゃない」

運転手は不満そうだった。

私は大きい札を取り出すと、渡した。

「お釣りはいりません」

「こりゃどうも」

私は静かにドアを閉めると、二人の後を距離を置いて歩き始めた。

幸い会話に熱中しているのか、私には気がつかない。

そのうち、ある建物―ホテルの前で二人は立ち止まった。

「そこに入るのかしら」

私は食い入るように二人を見つめた。

扉を開けて、二人が中に入ろうとした瞬間、男性の方がこちらを見た。

驚いた主人の顔が見えた。

「イヤ」

振り返った途端に、私は全速力で走りだした。こんな事ってあるのだろうか？偶然にも主人の浮気現場を目撃してしまうなんて。

「痛い」

あまりに、急いだったので、パンプスが脱げて、

ストッキングの足が、道の端に当たった。振り返ると、主人がこちらに向かってくる。

私は両方の足の、パンプスを脱ぐと、そのまま走りだした。

ストッキングがやぶれて、肌が直接アスファルトに触れる。

「何、この人」

アベックの女の方に真正面から当たってしまった。

「ごめんなさい」

「ちゃんと前見なさいよね」

「ごめんなさい」

その女性が私の裸足の足を見ているのに気がついた。

「何かおかしい人みたい」

「もうよせよ」

男の方が言った。

主人がもうすぐ後ろまで来た。

「すみません」

私は二人の間を通りぬけようとして、そのまま道に倒れてしまった。起き上がろうとするのだが、体が言うことを利かない。

「ここは」

目が覚めると、主人の顔が見えた。

「病院だよ」

「どうしてここにいいのかしら」

「君が倒れたんだよ。道の真ん中で」

「そう」

頭の中にその時の情景が浮かんで来た。

「貧血だそうだ」

「貧血？」

「そう、かなり数値が悪いらしい」

「そんな」

「君は働きすぎた。無理して突っ走りすぎているんだ」

「でも、仕方ないじゃない」

「とにかくしばらく安静にしないとイケないらしい」

「でも、仕事があるから無理だわ」

主人が私の顔を黙って見た。

「そんなに仕事が大事なのか？」

「だって・・・」

私は顔をそむけた。

この話題は今までも何度もした。また、蒸し返す気にはなれない。

主人が点滴をしていない方の手を握った。

私はもう一度向き直って、顔を見た。

「どうゆうつもり？」

「俺が悪かった」

「別に謝って欲しくなんかないわ」

「前から別れようと思っていたんだ」

「じゃあ、何故別れなかったの？不潔だわ」

そう言いながら、自分も同じ事をしているのに気がついた。

「ごめんなさい、言い過ぎたわ」

「いや、いいんだ。ただ、これだけは、言っておく。君と別れるつもりはない」

「あなた」

「ただ君があまりに俺に対して無関心だったんで・・・」

「無関心？」

「違うのか？」

「そうゆうつもりではないけれど、男の人は仕方がないのかと」

「言い訳に聞こえるかもしれないけれど、いつも君が仕事の事ばかり考えているようだったから」

「だから、かまって欲しかったの？」

「まあ、そんな所だ」

主人はまだ、私の手を握ったままだった。

手を握るのが嬉しかったのは、いつの頃だったろうか。

「仕事、やめないか？」

深い落ち着いた声だった。きっとこのセリフを何度も心の中で練習したに違いなかった。

「そんなの無理よ。それに、私、あしたも会社にいかなきゃ」

腕に点滴をしたまま立ち上がろうとした。しかし、眩暈がしてまたベッドの上に倒れてしまった。

「だから言ったら、休まないといけないって。医者がそう言ったんだから」

「お医者さんが？」

「そうさ。しばらくは入院だそうだ」

「そんな」

「かなり、良くない状態らしい、今の君は」

「今まで大丈夫だったのに」

「でも、もう限界だ」

「いつになったら退院できるのかしら」

「もう、やめないか」

主人の声が怒りに満ちていた。

私は目を閉じた。

「ここらで、一回休んでもいいんじゃないか。君だって本当はしんどいんだろう。二重生活で」

「二重生活？」

「そうさ、会社と家、それに俺と、林ってヤツか」

「知ってたの・・・」

「ああ」

「ごめんなさい」

目を大きくあけて主人に言った。

「明日、転勤願いを出す。だから、一緒に行こう。君は仕事をやめて」

「でも、あなたは？」

「俺も女とは手を切った、いや、これから切る。もともと遊びのつもりだったんだ」

「そうなの」

「ああ、だからもう一度やり直そう。いいだろう？」

主人は私の目を覗きこんだ。

「何だか疲れたわ」

そのまま私は深い眠りにおちてしまった。

自分の机の上にダンボールを置いて、引き出しの中の物を一つずつ入れていた。どれも、愛着のある物ばかりだった。

「もう、二十年もこの会社にいたのね」

ふと、入社したばかりの頃の事を思い出していた。期待に満ち溢れ、楽しい毎日だった。

「こんな形で会社を去る事になるなんて」

そう、何も成し遂げないまま、何もかも中途半端だった。

しかし、最後までいたら、それで満足感が得られたのだろうか？

「今日で最後だそうだね」

背後で男の人の声がして、振り返ると、それは、本部長だった。

「はい、今までお世話になりました」

「なんだか、嫁入り前の挨拶みたいだな。ま、尤も結婚はとっくの昔にしているらしいが」

「はい」

「良かったな」

「はい？」

「会社を辞める事になってだ。前から、心配していたんだ」

「私の事をですか？」

「そうだ。女の人は家庭にいるのが一番なんだ。あなたは、いつも突っ張っているように見えて、危なげだった」

「そうですか？」

「そうとも。女性は家庭に入って子供を産んでやっと一人前だ。今からでも遅くはない。がんばって子作りし給え」

「はあ、ありがとうございます」

とりようによつては、セクハラのようにも聞こえる。でも不思議と腹は立たなかった。

「ご主人と仲良くな」

「ありがとうございます」

本部長はそのまま自分の部屋に戻って行った。

私は頭を横に振った。

「イヤなヤツなんだか、いい人なんだか」
一人でつぶやいた。

ダンボールを持って、エレベーターホールに立っていると、どこからともなく、林君が姿を現した。

「部長、持ちますよ」

「ありがとう。でも、部長はやめて、もうやめたんだから」

「では、何と呼べばいいんですか？」

「それもそうね」

やってきたエレベーターに二人で乗り込んだ。

「ありがとう、助かるわ」

「タクシーですか？」

「ううん、車を下に止めてあるの。そこまでお願いできる」

「自分で運転するんですか？」

「ううん、主人が中で待っているから」

「そうですか」

下まで行くと、家の車が会社のすぐ前に止めてあるのが見えた。

「あれ、あの車なの、紺色の」

「部長」

林君が急に立ち止まった。

「何？」

林君が、再び私のダンボールを私に戻した。

「部長の事、好きでした」

「林君」

私は彼の目を見た。その目は本当の気持ちを持っているのが良くわかった。

「お元気で」

そのまま駆け足で、林君は会社の中に戻っていった。

私はそのまま車までいくと、助手席の窓を叩いた。

主人が体を斜めにして、ドアをあけた。

「一人でそれ、運んできたのか？」

「ううん、若い子がここまで持ってきてくれたのよ」

「そうか」

そのまま無言で車を発信させた。

「ただ今」

「おいおい、家の中は誰もいないぞ」

主人が後ろから、家の鍵し閉めながら言った。

「わかっているけど、何となく言ってみたい気分なの」

家の中もダンボールでいっぱいだった。引越しを真近に控えている。

「じゃあ、俺も、また会社に行ってくるよ」

「あなたの荷物はいいの？」

「それは、会社から支社に送らせるからいいんだ」

「そうなの、便利に出来てるのね」

「まあな」

主人は冷蔵庫を開け、ミネラルウォーターを一口飲むと、また、玄関から出ていった。

私は残りの水をコップに注ぐと、そのまま椅子に座った。

「ここに何年住んだのかしら」

このマンションは二人の共同名義で買った。自分達の財産というよりは、プライドの象徴だった。

「こんな形でここを出て行くとは思わなかったわ」

深く息をした。気のせいか、空気が埃臭い。

あれこれ物をひっぱり出したせいで、長年の積もり積もった埃が空中を舞っている。

電話が鳴った。私の携帯だった。

彼からの電話だった。私はしばらく携帯の画面を見た後、電話に出た。

「もしもし」

「やあ」

返事をしなかった。

「会社、辞めたんだって」

「ええ、今度主人の転勤で地方に行く事になって」

「どこへ？」

「地方よ。あなたには関係のない事だわ」

「どうゆう意味だ？」

「もう、あなたとも会わないって意味」

「会えるさ、新幹線だって飛行機だってある」

「ううん、もう、私がいいたくないの」

「何かあったのか？あれから」

「そう、ごめんなさい、約束を守れなくて」

「いいさ、お互い様だから」

「そうね。とにかく、主人と二人でやり直す事に決めたの。もうお互い若くはないんだし、もう今しかなから」

「それで、いいのか、今までのキャリアも捨てて」

「ええ、もう、十分考えた末の結論なの」

「そうか、それだったら仕方がない。でも、君に言ってなかった事がある」

「何？」

「愛してる」

「何、それ、他に彼女がいるんでしょ、彼女にもそう言っている訳？」

「いないんだ」

「えっ？」

「本当にいないんだ。只、寂しい男だと思われたくなくてそう言っただけだ」

「そんな」

「君とだったら、結婚できる、そう思っていた」

「今さら遅いわ」

「そうかい？」

「ええ、もうやめましょう。なんだか疲れたわ」

「そう・・・。じゃあ、元気で」

「ありがとう、あなたもね」

私の返事を待たずに、電話は切れていた。いったいどこまでが本当なのか、私には見当がつかねた。

「本当に疲れたわ。お酒でも残ってなかったかしら」

私はキッチンの前に立つとキャビネットを次々と開けた。ひっこし前に残っていた酒は処分していた。けれど、せめて料理酒でも残っていないだろうか。

まだ電話が鳴った。

「誰かしら」

テーブルの上に置いた携帯を再び持ち上げた。

それは秘書からの電話だった。

「もしもし」

「部長」

気のせいか声がうわずっている。

「どうしたの？」

「ごめんなさい、部長、今日、会社に行かなくて」

「いいのよ、具合が悪かったんでしょ」

「いえ、はい、あの。部長の顔を見るのがつらくって会社に行けなかったんです」

「そんなに悲しんでくれるの？ありがとう」

その気持ちは嬉しかったが、当惑した。

「違うんです。一言部長に謝りたくって、でも、面と向かって言ったら、何と言われるかわからなくて」

「何の事？」

もう、これ以上、ややこしい話はごめんだった。

「ご主人に、林さんの事を言ったのは私なんです」

「あなたが・・・」

「ごめんなさい。あの、いつも綺麗で、立派なダンナ様がいるのに、浮気しているなんて、許せないって思っ・・・」

「気がついてたの・・・いつから？」

「始めからです。女の勘は鋭いんです、部長。知らなかったんですか？」

「知らないわ、そんな事」

男社会で生きてきて、女のそういう面をすっかり忘れていたのかもしれない。

「とにかく、まさか、部長が辞めるなんて思っていなくて・・・ごめんなさい」

「いいのよ、今更。もう決めた事だし」

「でも、私が告げ口しなかったら」

「もうやめて、お願い」

私は電話を一方的に切った。

今、見つけたばかりの料理酒をコップに注ぐと、一気に飲み干した。

「もうやめよう、こんな事。身が持たないわ」

私は立ち上がると、マンシヨンのベランダに出た。

手すりから下を見下ろすと、植栽が箱庭のように見える。

私は体を手すりに寄りかからせ、上半身を外に出した。

「かわいいー」

女の子の声がした。

下を見下ろすと、散歩中の大型犬の回りに、大きいランドセルをしょった女の子達が群がっている。

喜んではしゃいでいる声がここまで聞こえてきた。

子供たちの姿をただじっと見つめていた。

やがて、犬がいなくなると、子供たちもどこかに行ってしまった。

私はまた、マンシヨンの中に戻ると、窓を閉めた。

完